

【原著】

認知症患者の口腔ケア質向上への教育効果

—精神科看護師の認識の変化—

Effectiveness of an Education to Improve Dementia Patient Oral Care

—Changes in Psychiatric Nurses' Perceptions—

中島富有子¹⁾ 原やよい²⁾ 黒木まどか³⁾ 晴佐久悟⁴⁾ 窪田恵子⁴⁾ 青木久恵⁴⁾

1)福岡看護大学 看護学部 看護学科 健康支援看護部門 2)福岡看護大学 看護学部 3)福岡医療短期大学 歯科衛生学科 4)福岡看護大学
看護学部 看護学科 基礎・基礎看護部門

抄 録

本研究の目的は、認知症患者の口腔ケア質向上に向けた教育を行い、そのことで変化した精神科看護師の認識を明らかにすることである。口腔ケア質向上に向けた教育として、精神科看護師に対し口腔ケアの看護研修会や動画による学習の機会を設けた。5名の認知症患者に、精神科看護師が学習した口腔ケアを実践した。口腔ケアの実践を始めて3ヶ月後、6名の精神科看護師に半構造化面接を行った。得られたデータを質的帰納的に分析した。

その結果、精神科看護師の認識として、4つのカテゴリを抽出した。カテゴリは、臭いの消失を実感したデータなどから構成された【口腔ケア実践の効果を実感】があった。口腔ケア質向上の意思を示すデータなどから構成された【口腔ケアの質を向上させようという認識へ変化】が認められた。また、口腔ケア拒否の対応に関する学習希望のデータなどから構成された【口腔ケアの学習の課題】があった。口腔ケア質向上に他職種の連携強化を希望するデータなどから構成された【歯科医師・歯科衛生士との連携強化の希望】があった。以上の結果から、本研究の教育は、認知症患者の口腔ケア質向上に有効であると考えられ、継続させる必要性が示唆された。

キーワード：認知症患者, 口腔ケア, 質向上, 精神科看護師, 認識

緒 言

わが国では、超高齢社会を迎え、それに伴い認知症患者が増加している。厚生労働省は、2012年、認知症患者が約462万人で軽度認知障害が約400万人と推計され、65歳以上の4人に1人が認知症または予備軍であることから、2015年から認知症施策を整備している¹⁾。認知症患者のほとんどが高齢であり、口腔の健康状態をみると、歯の本数が少なくなり口腔機能も低下傾向にあった²⁾。さらに、認知症患者は、口腔の自己管理能力は低下している場合があり、支援が必要であると考えられた。人にとって、口腔

は食物を食べ嚥下し栄養を取り込み、また、発音といったコミュニケーションなどに関わり生活する上で重要な機能を持つ。口腔の健康維持には、口腔の清潔を保つ器質的口腔ケアと摂食・嚥下などの口腔機能を維持・回復させる機能的口腔ケアが必要である²⁾。近年、健康において、口腔と全身の関連が解明され³⁾、口腔ケアの効果として、誤嚥性肺炎予防⁴⁾、認知症予防⁵⁾、脳の活性化⁶⁾などが明らかになっている。

口腔ケアについては、看護師を対象にした実態調査⁷⁾で、ほとんどの看護師が口腔ケアの必要性を感じ、口腔ケアと全身疾患との関連につ

いての知識があることが明らかになっている。しかし、口腔ケアの方法は多種多様で、看護師が口腔ケアに悩みを持っていたり、「舌苔が多い」や「出血しやすい」といった患者の持つ問題で口腔の状態に適した口腔ケアに困難を感じていることが明らかになっている⁷⁾。先行研究において、認知症患者の口腔ケアを工夫していく必要性⁸⁾、入院治療を受ける認知症患者を含む精神疾患患者に精神科看護師が十分な口腔ケアを実施できていない実態が明らかになり教育の必要性が示唆されていた⁹⁾。精神科看護師に対する教育によって、口腔ケアの質向上が図れると考えられたが、先行研究を概観する中で、認知症病棟で精神科看護師に口腔ケアの教育を行い、その効果を分析した研究は見当たらなかった。

本研究では、認知症患者の口腔ケア質向上に向けて、まず、精神科看護師に教育を行った。その後、学んだことを活かし、認知症患者に対して口腔ケアを実践してもらった。教育によって、変化した精神科看護師の認識を明らかにすることが、本研究の目的である。

研究方法

1. 研究対象

研究対象病院は約 300 床の私立精神科病院である。本研究対象は看護師であるが、認知症病棟において看護師 10 名・准看護師 10 名・看護助手 3 名の病棟スタッフ(以下、病棟スタッフ) 23 名を対象に口腔ケア質向上を目指した看護研修会の開催および動画による教育を行った。その後、教育を受けた病棟スタッフに認知症患者への口腔ケアを実践してもらうようにした。口腔ケア実践中、研究者が実践の問題などの相談に応じた。以下が、具体的な取り組みである(表 1)(表 2)。

2. 用語の定義

本研究における精神科看護師の認識とは、大辞林 第三版を参考¹⁰⁾に「精神科看護師が物事を見分け、本質を理解し判断したこと」とした。

3. 教育方法

表1. 口腔ケアに関する看護研修会および動画による教育内容

方法		教育内容
看護研修会	1回目 (60分)	パンフレットを使用 ・口腔内の観察とアセスメント ・加齢による口腔機能低下 ・向精神薬の副作用の影響 ・認知症患者が持つ口腔の健康問題 ・器質的口腔ケアの方法 ・機能的口腔ケアの方法 ・患者の緊張をほぐすための脱感作方法
	2回目 (60分)	模型を使いデモンストレーション 器質的口腔ケアおよび機能的口腔ケアについて演習
動画 (30分)	脱感作	患者の緊張をほぐすための脱感作方法
	器質的口腔ケア	認知症患者の状態に合わせた有効な歯ブラシやスポンジブラシを使用した口腔ケア
	機能的口腔ケア	認知症患者の状態に合わせた唾液腺マッサージ

表2. 認知症患者に対する昼食前後の口腔ケア

時期	実践する内容
11時	機能的口腔ケア ・唾液腺のマッサージ10回 ・パタカラ体操 パ、タ、カ、ラ、パタカラという言葉 を弾むように5回
昼食後	器質的口腔ケア ・患者の状態に応じて、歯ブラシやスポンジ ブラシなどを使用し口腔ケアを援助する。 ・認知症患者の残存機能を活かした方法で援助 する。

1) 病棟において看護研修会を開催(2回)

1回目(60分)にパンフレットを作成し、それに沿って教育を行った。まず、口腔内の観察とアセスメント、口腔機能評価などを説明した。加齢による口腔機能低下、向精神薬の副作用の影響などから生じる認知症患者が持つ口腔の健康問題について講義した。さらに、認知症患者の健康度に応じた器質的口腔ケアおよび機能的口腔ケアの方法について講義した。認知症患者の緊張をほぐすための脱感作について説明した。2回目(60分)に、模型を使いデモンストレーション後に、器質的口腔ケアおよび機能的口腔ケアについて演習を行った。

2) 動画 (30 分) による教育

看護研修会に参加できなかった看護師や看護研修会参加後に復習できるように、研究者が動画を作成した。内容は、認知症患者の緊張をほぐすための脱感作、器質的口腔ケアおよび機能的口腔ケアを収録した。動画を活用して、病棟スタッフに教育を行った。

4. 学習後の口腔ケアの実践

看護管理者と話し合い、通常の口腔ケアに加え、まず、病棟スタッフが負担と感じないように、5名の認知症患者に、学習した口腔ケアを活かして実践してもらった。昼食前後に口腔ケアを行うようにした。11時に機能的口腔ケアとして、唾液腺のマッサージやパタカラ体操を実践し、昼食後に器質的口腔ケアとして、歯みがきの援助を行うように設定し、口腔ケアの実践をしてもらった。

5. データ収集方法

半構造化面接において、研究参加者の承諾を得てから録音した。個室を使用し研究参加者のプライバシーに配慮し行った。データ収集のプロセスとして、可能な限り研究参加者が話す内容について、研究者が的確に捉えられているか、研究参加者に確認を行いながらインタビューしデータを収集した。研究者の独善的解釈に陥ることのないよう、データ収集からの全過程を通じ、質的研究に習熟したスーパーヴァイザーにスーパーヴァイズを受け、解釈を検討し信頼性の確保に努めた。先行研究^{1) - 7)}などを基にインタビューガイドを作成し実施した。インタビューガイドの主な内容は、本研究の教育前と教育後の口腔ケア実践に対する認識、教育を受けて学習できたもの、口腔ケアにおける他職種連携の認識などとした。

6. データ収集期間

2018年11月中旬～12月中旬に、2回の看護研修会開催および動画での教育を病棟スタッフに行った。その後、12月中旬～2019年3月中旬までの3ヶ月間、病棟スタッフが5名の認知症患者に口腔ケアを実践した。2019年3月中旬～3月末に精神科看護師の勤務に合わせ、イン

タビューを行いデータ収集した。

7. データ分析方法

まず、録音した面接内容はすべて逐語録に起こした。精神科看護師の口腔ケアの認識について分析した。データを繰り返し読み、そのデータの示す意味を解釈した。対象者全員の逐語録をコード化し、データが示す意味や内容を分類し、同じ意味を示すデータは1つのコードにまとめた。さらに、そのコードの中から本研究の取り組みによって変化した精神科看護師の認識について検討した。その変化した精神科看護師の認識を示すコードを抽出した。精神科看護師の認識を示すコード間の関係性について、検討を何度も繰り返した。類別したコードのかたまりの特性を明らかにし、抽象度を上げカテゴリとしてまとめた。カテゴリには、その内容や性質を表す言葉で命名し分析した。

8. 倫理的配慮

本研究の取り組みを開始する前に研究対象病院の管理者に、文書及び口頭で研究について説明し研究の承諾を得た。精神科看護師には、研究の目的、方法、回答の任意性、プライバシーの保護、匿名性の保持、不利益はないこと、結果は学会などで公表するが個人が特定されないことなどを、文書及び口頭で説明した。同意書の署名をもって研究の同意を確認後、研究参加者に半構造化面接を行った。本研究は福岡学園倫理審査委員会の承認(承認番号 304)を得て実施した。本研究において申告すべき利益相反事項はない。

結 果

本研究の取り組みに参加している精神科看護師の内、研究同意が得られた6名に半構造化面接を行った。インタビューは1回～2回行い、平均時間は42分であった。研究参加者は全て女性で、平均年齢が42.5歳、看護師経験及び精神科勤務経験が13.7年であった。データを分析した結果、精神科看護師の認識として、4つのカテゴリを抽出した(表3)。カテゴリは、【口腔ケア実践の効果を実感】、【口腔ケアの質を向

上させようという認識へ変化】、【口腔ケアの学習の課題】、【歯科医師・歯科衛生士との連携

て、(取り組み前と) 違うと思います。」という患者の反応として効果を実感している内容を

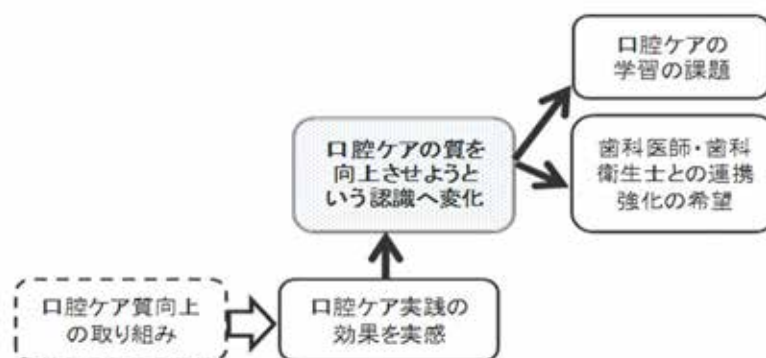


図1. 口腔ケア質向上の取り組みによって変化した精神科看護師の認識

強化の希望】であった。精神科看護師は、【口腔ケア実践の効果を実感】の話につなげ、【口腔ケアの質を向上させようという認識へ変化】の話をしたことから、カテゴリの構造としては、まず、【口腔ケア実践の効果を実感】が生じ、その後【口腔ケアの質を向上させようという認識へ変化】が生じていた。それと同時に、【口腔ケアの学習の課題】と【歯科医師・歯科衛生士との連携強化の希望】が生じていた(図1)。カテゴリを【 】、そのカテゴリを表す特徴的な言葉を「 」で表す。以下、カテゴリ毎に主な研究参加者の特徴的言葉を交え述べる。

1. 口腔ケア実践の効果を実感

主なデータとして、「動画、私としては、分かりやすいと感じています。看護研修会で、知識が増えて。それから(口腔ケアを)実践して臭いが、違いますね。」「歯垢がたまっていた患者さんがいて、口腔ケアを前より(丁寧に)することで、歯垢がなくなりましたし、口臭もなくなりました。」「肺炎予防につながったかっていうのは、はっきりは分かりませんが、でも口腔ケアをすることで、口臭もなくなって違うし。」など、口腔ケアによって効果を実感していることを語った。「(患者が)食べ物を飲み込まずに口の中に溜めていたりしたけど。患者さん自身が、歯ブラシを渡したら、歯を磨くんだという理解というか、意識が少し変わってきましたね。」や「患者さんもスッキリしたって言われ

語ったことから、【口腔ケア実践の効果を実感】というカテゴリとした。

2. 口腔ケアの質を向上させようという認識へ変化

「5名は重点的にするのですが、時間がある時に5名だけじゃなくて、他の患者さんもなって。(看護師の認識が)変わったと思います。」や「患者さんが、(口腔ケアを)俺もしてと来られて、それから他の人も広げていっていますね。」など、5名から他の患者の口腔ケアに広がっていることを語った。「今、(口腔ケアに対して)意識が変わりつつあるかなってところです。」「口腔ケアは忙しい時は、雑になっていたけど、それが看護師の意識というか、自分が今日は(5名の認知症患者の)口腔ケア担当だからと意識して、少しずつ意識が変わっていますね。」「(看護師が)自分達自身で、やろうと思ってきたので、口腔ケアを負担と嫌がらずできると思っています。」など、口腔ケアの質を向上させようという意識へ変化していることを語ったことから、カテゴリを【口腔ケアの質を向上させようという認識へ変化】とした。「最初は大変かと思ったけど、今は、(研究の取り組みを)負担なくやれています。続けると思う。」といったことを語った。

3. 口腔ケアの学習の課題

「拒否の方をどうやってしたらいいのかなってというのが、私達には難しいんですよね。ピ

表3. カテゴリ毎の主なデータ

カテゴリ	カテゴリ	カテゴリ	カテゴリ
口腔ケア実践の効果を実感	口腔ケアの質を向上させようという認識へ変化	口腔ケアの学習の課題	歯科医師・歯科衛生士との連携強化の希望
動画、私としては、分かりやすいと感じています。看護研修会で、知識が増えて、それから(口腔ケアを)実践して臭いもすし、違いますね。	5名は重点的にするのですが、時間がある時に5名だけでなく、他の患者さんもとなって。(看護師の認識が)変わったと思います。	拒否の方をどうやってしたらいいのかなっていうのが、私達には難しいんですよね。ビデオを見て、何となくイメージはつくんですけど。	(歯科医師が)往診には来てくれるから、前よりはいいですね。もっと病棟に来てくださるといいなと思います。
歯垢がたまっていた患者さんが、いらっしゃて。口腔ケアを前より(丁寧に)することで、歯垢がなくなりました。口臭もなくなりました。	患者さんが、(口腔ケアを)俺もしてと来られて、それから他の人も広げていっていますね。	(口腔ケア時に)患者の口の中に指を入れても噛まれるしですね。上手にできる方法があるのかなとか(学習したい)。	(歯科衛生士と)一緒にやりながら覚えてもらってっていうのがいいのかな。歯科衛生士の方法をマスターするのがいいですね。
肺炎予防につながったかっていうのは、はっきりは分かりませんが、でも口腔ケアをすることで、口臭もなくなって違う。	今、(口腔ケアに対して)意識が変わりつつあるかなっていうところですね。	拒否されると困りますね。	看護教員や歯科衛生士などと一緒に、口腔ケアに回るのがいいかな。
(患者が)食べ物を飲み込まずに口の中に溜めていたりしたけど。患者さん自身が、歯ブラシを渡したら、歯を磨くんだという理解というか、意識が少し変わってきましたね。	口腔ケアは忙しい時は雑になっていたけど、それが看護師の意識というか、自分が今日は口腔ケア担当だからと言って、少しずつ意識に変わっていますね。	(口を開けられなくて)残渣物とかも結構溜まってしまうというのもあるので、どうしたらいいんだろうって。	(歯科治療が)外から往診だから、歯科が病院にあるといいと思います。
患者さんもスッキリしたって言われて、(取り組み前と)違うと思います。	(看護師が)自分運自分で、やろうと思ってきたので口腔ケアを負担と嫌がらずにできています。	触られることも嫌がられたりとかするからですね。	(往診があるので)気軽に歯科受診ができるしですね。前は外出して、連れて行ってっていう感じだったから。
臭いが良くなりましたね。	(口腔ケアの質向上に向けて)これが継続できるように思ってるんですけど。	肺炎とかも防げるっていうから。結構繰り返す人も多いから。防ぎたいですね。	歯科衛生士さんと一緒にするのいいと思っています。
今は、臭いとか、病棟に入ってくるからの臭いとかも、ちょっとは前と比べたら違うと感じますね。	今、意識が変わりつつあるかな、っていうところですね。	指入れても噛まれるしですね。なので、上手にできる方法があるのかなとか。	歯科衛生士さんと連携することです。
以前と比べたら、全然口腔の状態、きれいになってると思います。	最初は大変かと思ったけど、今は、(研究の取り組みを)負担なくやれています。続けると思う。	拒否されスムーズにできないことです。	前は歯科受診が大変だったけど、今は良くなりましたけどね。

ビデオを見て、何となくイメージはつくんですけど。」や「(口腔ケア時に)患者の口の中に指を入れても噛まれるしですね。上手にできる方法があるのかなとか(学習したい)。」など、学習の課題を語ったことから、【口腔ケアの学習の課題】というカテゴリにした。

4. 歯科医師・歯科衛生士との連携強化の希望
 「(歯科医師が) 往診には来てくれるから、前よりはいいですね。もっと病棟に来てくださるといいなと思います。」や「(歯科衛生士と)一緒にやりながら覚えてっていうのがいいのかな。歯科衛生士の方法をマスターするのがいい

ですかね。」など、歯科医師・歯科衛生士との連携強化の希望を語ったことから、【歯科医師・歯科衛生士との連携強化の希望】というカテゴリにした。

考 察

本研究のカテゴリの構造(図1)は、6名と対象者数が少ないものの、口腔ケア質向上に向けた教育によって変化した精神科看護師の認識を表すものと考えられる。4つのカテゴリは、【口腔ケア実践の効果を実感】が生じ、その後【口腔ケアの質を向上させようという認識へ変化】が生じていた。同時に【口腔ケアの学習の課題】と【歯科医師・歯科衛生士との連携強化の希望】が生じ、本研究の教育で変化した精神科看護師の認識を示すものであった。口腔ケアの質向上に向け、精神科看護師に対する看護研修会や動画などによる教育は効果的であることが明らかになった。

【口腔ケア実践の効果を実感】は、自己効力感に影響を及ぼす成功体験ができたと考えられるカテゴリであった。Bandura¹¹⁾は、自己効力感を育てるために、「制御体験」、「代理体験」、「社会的説得」、「生理的・感情的状態が良いこと」といった4つの主要な影響力を明らかにしている。その中で、制御体験は忍耐を要する成功体験を意味し、自己効力感を作り出す最も効果的な方法である。本研究における口腔ケアの質向上の教育は、口腔ケア実践の効果を実感という認識が得られたことから、Bandura¹¹⁾がいう成功体験の認識が得られたと考えられた。また、日常の業務に加え本研究で教育を受けた口腔ケアを実践することの負担が推測され、Bandura¹¹⁾の忍耐を要する成功体験の可能性があった。【口腔ケア実践の効果を実感】が生じた後に、【口腔ケアの質を向上させようという認識へ変化】があり、精神科看護師の中に、口腔ケア質向上への自信と意欲ができつつあった。その自信と意欲は、自己効力感の高まりと考えられた。自己効力感は、成果を生み出す行為が自分にできる自信が生じたという認知である

¹¹⁾。本研究の教育によって、口腔ケアの質向上への自己効力感が高まったことが考えられた。さらに、「最初は大変かと思ったけど、今は、(研究の取り組みを)負担なくやれています。続けると思う。」といった精神科看護師の言葉から、学習した口腔ケアを効果的に実践することが、次第に負担なく行えつつあることが考えられた。自己効力感の高まりが影響し、本研究で口腔ケアを実践する認知症患者5名から、他の患者に対する口腔ケアへと広がっている可能性が明らかになった。

【口腔ケアの学習の課題】は、口腔ケア拒否の対応に関する学習希望が多かった。先行研究⁹⁾においても、看護師の認識の中で、口腔ケアが十分できない理由で、一番多いのが患者の拒否であった。口腔ケアに対する拒否は、大きな問題であり、今後の課題と考えられた。口腔ケアを拒否する背景には、過敏症状が考えられた。顔面や口腔周囲に過敏症状があると口唇に力が入り、口腔ケアが困難になる。白部ら¹²⁾は、認知症患者を含む要介護高齢者を対象に調査を行い、顔面や口腔周囲に過敏症状を有する者は、要介護度が高く生活自立度が低下していることを明らかにし、過敏反応に配慮した口腔ケアの必要性を示唆している。効果的な脱感作の活用など過敏症状に配慮した口腔ケアが必要であると考えられた。適切な口腔ケアは、認知症患者にとって、気持ち良いものであり、精神症状が安定し認知機能の進行緩和にもつながる可能性がある¹³⁾。また、口腔ケアの質を向上させることは、食事の安全、そして、おいしく食べられることにつながる¹⁴⁾と考えられる。

【歯科医師・歯科衛生士との連携強化の希望】は、口腔ケアの質向上に他職種との連携強化を希望するデータなどから構成されていた。精神科看護師が他職種と連携した口腔ケアを十分できていない実態調査^{15),16)}があり、認知症患者の口腔の健康状態に応じた口腔ケアができるように、歯科衛生士や歯科医師など専門職へ協力を要請^{17),18)}し、連携した口腔ケアができる体制^{19),20)}が必要であると考えられた。

今後、研究結果や先行研究などを参考¹²⁾⁻¹⁹⁾に、本研究の取り組みを継続または改善し、さらなる口腔ケアの質向上ができるようにすることが課題である。

結 語

本研究の取り組みによって精神科看護師は、【口腔ケア実践の効果を実感】し、【口腔ケアの質を向上させようという認識へ変化】があった。それと同時に、【口腔ケアの学習の課題】と【歯科医師・歯科衛生士との連携強化の希望】が生じていた。この4つのカテゴリが、本研究の教育で変化した精神科看護師の認識を表していた。

引用文献

- 1) 厚生労働省 認知症施策推進大綱(2019) : <https://www.mhlw.go.jp/content/000522832.pdf>, (2019年8月29日)
- 2) 厚生労働省 e-ヘルスネット(2008) : <https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/keywords/elderly-people> (2019年8月29日)
- 3) 深井穂博, 古田美智子, 相田潤 他 : 歯科患者の口腔内状態および全身の健康状態 8020 推進財団歯科医療による健康増進効果に関する研究, 日本歯科医学会誌, 35, 39-50, 2016
- 4) van der Maarel-Wierink CD, Vanobbergen JN, Bronkhorst EN, *et al.* : Oral health care and aspiration pneumonia in frail older people: a systematic literature review, *Gerodontology* 30, 3-9, 2013
- 5) Yamamoto T, Kondo K, Hirai H, *et al.* : Association between self-reported dental health status and onset of dementia: a 4-year prospective cohort study of older Japanese adults from the Aichi Gerontological Evaluation Study (AGES) Project, *Psychosom Med*, 74(3), 241-248, 2012
- 6) 森田婦美子, 山本純子, 高橋弘枝 : 脳の活性化を促す口腔内刺激 近赤外光イメージング装置を用いた脳血流量の測定を行って, 太成学院大
学紀要, 14, 149-154, 2012
- 7) 横塚あゆ子, 隅田好美, 日山邦枝 他 : 病棟看護師の口腔ケアに対する認識 病棟の特性および臨床経験年数別の比較, 老年歯科医学, 27(2), 87-96, 2012
- 8) 新垣初美, 玉那覇和美, 饒波陽子 : 認知症病棟における口腔ケアの取り組み 肺炎予防に着目して, 日本精神科看護学術集会誌, 58(1), 174-175, 2015
- 9) 原やよい, 中島富有子, 窪田恵子 他 : 精神科看護師の口腔ケアを困難にする要因, バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌, 21(1), 61-66, 2019
- 10) コトバンク 大辞林 第三版 解説 認識 <https://kotobank.jp/word/%E8%AA%8D%E8%AD%98-110838>. (2019年11月12日)
- 11) Bandura Albert(1997)/本明寛, 野口京子監訳 (2006) : SELF-EFFICACY IN CHANGING SOCIETIES 激動社会の中の自己効力感, 金子書房, 東京, 1-30, 2006
- 12) 白部麻樹, 中山玲奈, 平野浩彦 他 : 顔面および口腔内の過敏症状を有する要介護高齢者の口腔機能および栄養状態に関する実態調査, 日本公衆衛生雑誌, 64(7), 351-358, 2017
- 13) 西村康至, 竹田 晴治 : 口腔ケアからの認知機能改善を試みて 食事行動の改善といきいきとした表情へ向けて, 日本精神科看護学術集会誌, 60(1), 192-193, 2017
- 14) 鈴木史彦, 小松泰典, 北條健太 他 : 認知症による摂食嚥下障害がみられた高齢者に対して異なるアプローチをした2症例, 奥羽大学歯学誌, 44(2), 61-67, 2017
- 15) 中島富有子, 原やよい, 窪田恵子 : 口腔ケアにおける精神科看護師と歯科医師との連携の実態, 日本看護科学会誌, 38, 229-236, 2018
- 16) Fuyuko Nakashima, Keiko Kubota and Kimie Machishima : Self-Assessment of "Team-Based Oral Care" in Psychiatric Nurses, *Journal of Japan Health Medicine Association*, 27(2), 151-158

- 17) 柴田由美, 隅田好美, 日山邦枝 他: 歯科衛生士介入による病棟看護師の口腔ケアに対する認識変化, 日本歯科衛生学会雑誌, 8(2), 70-83, 2014
- 18) 上妻日出信, 小澤誠裕, 武内秀夫 他: 精神障がい者における歯科医師と看護師の連携による口腔ケアの有意性 聞き取り調査分析より, 藍野学院紀要, 21, 67-72, 2008
- 19) 平野聖, 竹田恵子, 大田晋 他: 医学福祉における多職種連携のあり方に関する研究, 川崎医療福祉学会誌, 24(2), 209-220, 2015
- 20) 厚生労働省: チーム医療推進のための基本的な考え方と実践的事例集, 2011 <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001e hf7.html>. (2019年8月1日)

Effectiveness of an Education to Improve Dementia Patient Oral Care —Changes in Psychiatric Nurses' Perceptions—

Fuyuko Nakashima¹⁾ Yayoi Hara²⁾ Madoka Kuroki³⁾ Satoru Haresaku⁴⁾ Keiko Kubota⁴⁾

Hisae Aoki⁴⁾

1) Fukuoka Nursing College, Faculty of Nursing Department of Nursing, Division of Support Nursing, 2) Fukuoka Nursing College, Faculty of Nursing, 3) Fukuoka College of Health Sciences, Department of Dental Hygiene, 4) Fukuoka Nursing College, Faculty of Nursing Department of Nursing, Division of Basic Medical Sciences and Fundamental Nursing

Key words: Dementia Patients, Improvement Quality, Psychiatric Nurses, Perceptions

The purpose of the study was to clarify how an education conducted to improve the quality of oral care in dementia patients may have changed psychiatric nurses' perceptions of oral care. The education consisted of providing psychiatric nurses with the opportunity to learn how to provide oral care by attending a training session for nurses and watching a video. Subsequently, the nurses practiced oral care for five dementia patients. Three months after this initial practice, semi-structured interviews were conducted with 6 of the psychiatric nurses and the data were qualitatively analysed. Four thematic categories regarding changes in their perceptions of oral care were identified. They 'actually experienced the effectiveness of oral care' (such as halitosis disappearing altogether) and 'became interested in improving the quality of dementia patient oral care'. In addition, they 'learned about problems in providing oral care' as evidenced, for example, by increased interest in learning how to deal with patients' refusal to cooperate. They also became 'interested in improving collaboration with dentists and dental hygienists', as evidenced by their interest in improving oral care through cooperation in medical care through cooperation in medical care. Study results suggested that this education to improve oral care for dementia patients was effective and should be continued.